

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第二十一号（二〇〇八年二月）

ご存知ですか

兼平ちえこ

石岡市民の歌

作詞 中村素映子 作曲 山村朝男

一、明ける常陸の 大空に

筑波嶺はるか 澄むところ

躍進の意気 火と燃ゆる

ああ石岡は 人の和の

笑顔あかるく 揃う都市（まち）

二、霞ヶ浦の 水の幸

かがやく歴史 つぐところ

興る槌音 ひびく歌

ああ石岡は たぐいなき

恵みゆたかに 拓く都市

三、府中国府の むかしから

文化の花の 咲くところ

自治の礎 ゆるぎなく

ああ石岡は 夢若く

とわの栄を 拓く都市

石岡市民音頭

作詞 鈴 志芸夫 作曲 岡田佳久

一、霞ヶ浦から 春が来て

筑波の山に 冬が去る

風もみどりの 恋瀬川

人の心も なごやかに

石岡石岡 よいところ

二、常陸国府の 夢の跡

桜ちるちる 国分寺

ひとりたたずむ 陣屋門

古い歴史も なつかしく

石岡石岡 夢どころ

三、水がよいところ 酒どころ

タンスたくさん つくるところ

しゃれた文句に 三味あわせ

唄う都都逸 声のよさ

石岡石岡 歌どころ

四、総社の森に こだまする

祭太鼓の いさましき

関東名物 獅子まつり

おかめひよっこ 山車も出る

石岡石岡 よいところ

この石岡市民の歌と石岡市民音頭は、昨年十月に歴史の案内をした皆さんとの昼食時の割烹店さんでの「御手茂登」に書き留められていたことで知りました。

歴史の里いしおかを讃え、郷土を慈しんだ市民の歌があったことを、石岡市民となって十七年目にして初めて知りました。

私の好奇心が騒いで、早速、聴きたい、見たい、唄ってみたい、踊ってみたいと思ったのでした。

それで先ずはCDは、カセットは、と石岡商工会、まち蔵、市内の楽器店さんへ問い合わせたのでした。そこでようやく市役所の取り扱いということがわかり、終了間際の市役所に駆け込んだのでした。しかし、残念ながらレコード盤のみで、耳にすることができませんでした。

市の色々な催しには、この市民の歌や音頭が流されていたのですが、あまり参加しなかったことと注意することも無かったので知る事はありませんでした。これはいけないと反省しきり。

しかし、実際のところ、この市民の歌や市民音頭を知っていて、口ずさむことができる人がどれくらい居られるのでしょうか。

どのようなメロディーなのか知りませんが、この市民の歌や市民音頭が、市民の皆さんに広く親しまれ、愛誦され、踊られるようになったら、郷土愛ももっと育まれる様になるのではないかと思います。

市民生活課にお願いいたします。折角作られた市民の歌、市民音頭ですから、CDもしくはカセットテープなどを作成し、色々な行事の折に、また各地区内の催しの折に是非、市民の歌を聞かせてください。市民音頭を踊らせてください。

・またひとつ福ふえて 如月三日

(ちえこ)

馬はなぜ走る？

ウマの進化を振り返ってみると、実に気の毒な経過を辿っている。奇蹄類で現存しているのはウマ、バク、サイの3科のみで、いずれも絶滅の危機にさらされている。

現在、野生馬で生存しているのは、「モウコノウマ」一種のみで、世界各地に野生馬といわれているものは、全て「家畜馬」が野生化したものである。西部劇に出てくるインディアンのは、スペイン人等がヨーロッパから持ち込み、後に野生化したもので、コロンブス以前の米国外陸にはウマは存在しなかった。なお米国南部の野生馬ムスタングは、スペイン語の「はぐれもの」からきており、やはり、家畜馬が野生化したものである。

そもそもウマの祖先は、五千万年前(始新世)北米などにエオヒップスといわれる犬ぐらいの大きさで、前肢の指は4本、後は3本であり、草ではなく、木の葉を食べていたという。

ところが四〇〇万年ぐらい前(鮮新世)エオヒップスから進化した北米のプリオヒップスは、4肢とも1本指で、かなり現在の馬らしくなったが北米では絶滅。その前、氷河期にベーリング海峡を渡りアジアに広まって、モウコノウマとして進化し、生き残った。

そしてBC四〇〇〇年頃、シベリアではモウコノウマは一部家畜化され、牽引用の馬となり、更に改良されて中東、ヨーロッパ、アフリカへ

と広まり、究極はアラブ種やサラブレッド種などに改良されていったという。

さて馬属の悲劇の話だが、その源は消化管の位置関係にあるという。牛など反芻獣は嫌気性菌による醗酵タンク(反芻胃)が小腸の前面にあるため、バクテリアが合成したアミノ酸を小腸で十分に吸収できるが、馬は胃で消化後、小腸で一部吸収するものの、肝心の醗酵タンク(巨大な盲腸)は小腸の後にあるため、菌体タンパク質を十分吸収できず、みすみす貴重なアミノ酸を排出してしまう羽目となった。故に、必須アミノ酸の少ない草から、必要なだけの必須アミノ酸を吸収しようとすれば、大量の草を食べざるを得ず、必然的に体は大きくなっていった。即ち、最低限必要な必須アミノ酸を確保するために、やむをえず余分な「非必須アミノ酸や炭水化物」等を大量に取り込むことになり、これらはいずれも脂肪として蓄積され、この余分のエネルギーを捨てないことには生理的バランスが取れないこととなった。そのため馬は、過剰なカロリーを放棄するために、何がなんでも走りまわらざるを得ない運命を背負うことになったと言われる。

さてこの事はネズミ、ウサギなども同じで、一日に一〇キロメートル近くも走り回り、必死にエネルギーを捨てまくっているという。ただしネズミやウサギは、自分が排泄した、豊富にタンパク質を含む糞を巣穴などで食べ、再吸収するため、栄養が満たされ、繁殖率旺盛な動物へと進化していったという。

野生馬が、アジア以外で滅亡した原因は色々考えられるが、その一つは、「微生物によるタンパク質を十分に吸収できない消化システムにあった」とする最新の仮説が提言されている。

狼煙(のろし)の由来

我家のジョン(中型犬)は散歩中、時々そのウンチが、高さ一〇センチぐらいに直立することがある。実に不思議な現象だ。ところが最近読んだ、平岩米吉著「狼―その生態と歴史―」(築地書店)によると、狼のウンチもやはり直立するそうだ。同著者が飼育していた朝鮮狼は直径三・五センチ、長さ二〇センチの黒い棒状の糞が、真つすぐ立っているのを時々見たことがあると書いてある。

同著者によると、唐時代の西陽雜俎(ゆうようざつそ・八六二年)という書に「狼糞の烟直上す、烽火(のろし)にこれをうつ」とあり、宋時代の俚雅(ひが)という書には「古の烽火、狼糞を用う。その煙直にして聚り(あつまり)、風吹くといへども、斜めならず」と記してあるという。

平岩氏によると、この直立した狼の糞は、烽烟(のろし)に似ている事から、狼煙の字を当てたのであろう。更に、狼の遠吠えが、遠距離まで聞こえることから、直立する狼糞も、遠くの仲間に変事を知らせる烽烟に適していると考え、その糞を燃やせば烽烟(狼煙)になると信じられたに相違ないと述べている。

日本狼は洋犬輸入によるジステンパーや狂犬

病感染等で絶滅し、北海道のエゾ狼は、明治政府の賞金付き駆逐策により、人為的な種の絶滅に至った。愚かな歴史の見本である。そして今、経済成長至上主義や大国のエゴにより、我々の子孫が住めなくなるような、荒廃した惑星への道を突っ走っている感がある。もし人類に「知恵」というものがあるのなら、この辺で確実に歯止めを掛け、あの時代の祖先のしつかりとした軌道修正のお陰で、今日の我々があるといわれるようにしなければならない。

鴛鴦(オシドリ)は本当に仲良し？

日本では明治初年以來、重婚を禁止してきた。今日、先進国のほとんどが一夫一婦制(単婚)だが、発展途上国など、重婚を許す国は多数ある。

そもそも生物は、単細胞でクローン増殖をしていた時代には、個体の老化死は無かった。今から十億年前、多細胞生物へ進化しても、無性生殖では悪環境を生き延びられないため、多様性が必要となった。そこで七億五千万年前、生物は、雄というものを生み出し、雌雄が半分ずつ遺伝子を持ち寄って、多様化した子孫を生み、その内の適者のみが生存できるようになった。さて、いよいよ有性生殖が始まると、A雌はB雄との番(つがい)ではうまく胚が育たず、C雄となら子が育つという現象が、しばしば見られるようになった。そこで動物は、AとBとの単婚は解消すること無く、A雌はB以外の雄と積極的に「番い外交尾」(EG-Extra Pair

copulations)をするようになり、又、B雄も他の雌となら、うまく子を作れることもあり、互いに積極的にEPCを行うようになった。このEPCこそ生物繁栄の原動力となり、多くの動物で日常見られ、DNAの基本的な戦略となった。

例を挙げれば、今日では親子のDNA鑑定ができるようになったので、ある研究者は、ツバメの巣の6羽の雛を調べたところ、2羽は正しく夫の子であったが、あとの4羽は、それぞれ

他の4羽の雄の子であったと報告している。即ちこの雌は、夫の他に4羽の雄と交わり、平気で間男の子を、我が夫に面倒を見させていたと言っ事になる。なんと不埒な……と言いたい所だが、自然界では当然の原理であり、子孫繁栄の基本なのであろう(動物の夫婦が互いにEPCを行なう場合、間男の子を育てさせられるなど実損は雄の方が大、故に嫉妬心は雄の方が雌より何倍も強いといわれている)。

ギター文化館発

常世の国の恋物語百

ことば座2008年定期公演日程

第 6 回公演	2月17日(日曜日)
第 7 回公演	4月20日(日曜日)
第 8 回公演	6月15日(日曜日)
第 9 回公演	8月17日(日曜日)
第10回公演	10月19日(日曜日)
第11回公演	12月21日(日曜日)

2008年「ことば座夢クラブ」年会員募集中!!

平成20年「ことば座夢クラブ」年会員を募集しております。会員様には、ギター文化館での定期公演の入場のほか、ことば座主催の公演の割引、年四回発行の季刊紙の送付などの特典があります。ふるさとに生まれた全く新しい手話を基軸とした舞台表現、朗読舞と朗読舞女優小林幸枝をぜひ応援下さい。

個人年会員 10,000 円

法人・団体会員 30,000 円 口会員 50,000 円 口会員

詳しくは下記ことば座事務局までお問い合わせ下さい。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35

0299 24 2063

fax 0299 23 0150

次の例は鴛鴦（おしどり）。

諺にも鴛鴦の契り（えんおつちぎり）とか、いつも二羽が一緒なので夫婦愛の象徴とされているが、とんでもない話。冬の雄はなぜあんなに綺麗な羽をしているのか？

答えは妻以外の雌にも、もてたいためで、婚姻色の典型である。それでいて妻も夫に劣らずEPCを行なうので、夫は妻が他の雄に寝取られないよう、陰湿に付きまとい、常時見張っている（＝配偶者防衛）のであり、決して仲睦まじいわけではないのだと、最近の動物行動学では唱えている。イヤハヤ、文学と科学の乖離に驚かされる。

さて次の例はヒト。人間の受精機構を具体的に見ると、腔内に放出された多数の精子は、運の悪い一匹の精子が、偶然にも卵子に辿り着き、幸運を射止めたなどと昔の本には書いてあるが、とんでもないウソツパチ。

現実、精子は曲がりくねった長い道のり、粘液の激流、繊毛の逆流、悪条件のPH、抗精子抗体の襲撃、食細胞による貪食作用など猛烈な攻撃に耐え、やっと卵子に辿り着いても更に強固な卵膜を突破貫入する苦難が待ち構えている。偶然・幸運などでは説明できない。

結論は、ひ弱な精子による偶然的受精を断固拒否するための尊厳なるメカニズムだといえる。即ち、多重交尾により、多種の精子をミックスし、精子競争に打ち勝ったもののみが目的を果たすように仕組みられた、過酷で巧妙な試練なのである。

事実、いろいろな動物を見ると、雌がEPCを行なう場合、相手はどんなにカッコ良くとも、決して未婚の若雄は選ばず、妻や子を持つ老練な実績のある雄を選ぶという。まさにこの辺に、動物の神髄を見たような気がする。

さてヒトは七〇〇万年の歴史を持ちながら、高々最後の二万年の文明が築いた、更にたった一〇〇年そこそこの社会規範である単婚制度に本当に価値があるのか。野生が築いた歴史の重みをもっと尊重しなくてよいのか？

ゴリラ、ライオン、セイウチなど一夫多妻のハーレム型の王は、妻達が下位の雄と交わることをかなり黙認している（ライオンの雌は一発情期に複数の雄と計一〇〇回も交尾するといふ）。チンパンジー、ボノボ、ニホンザルなどは正に乱婚型。オランウータン、トラ、ヒョウなどは独居型。人類は建て前は一夫一婦型であるが、生物学的には、かなり乱婚型に近いと分類されている。

私は別に現今の社会規範に異を唱えるつもりはないが、生物本来の生存ルールを無視した人間社会の仮面のモラルとやらが、雪豹やジゴンのような絶滅危惧種への仲間入りの、道標にならなければ良いと思うだけである。

『人間とはなにか？』という、永遠のテーマに対し、現実（ヒトのEPC調査の報告多数あり）を直視し、表に出にくい人間の深層心理に、もっと忠実になるべきではないか。人類のわずか一万年の文明など余りにも根が浅い。誰かのご都合で作られた宗教や国法など、まやかし物

が多すぎる。正論が無謀な論理に押し捲られ、歴史の彼方に埋没された例は幾つもある。人類の単婚制崩壊を、予言者ぶって高唱するつもりはないが、万物の霊長などと奢り高ぶらず、もっと素直に野生の重みを尊重し、再考の必要ありと思うが、いかがなものでしょうか？

ギター文化館 2008 CONCERT SERIES

The 15th anniversary

ギター文化館も開設して今年で15年周年を迎えます。

魅力タップリの大型企画で皆様のご来場をお待ちいたしております。

- 2月11日 クリスチャン・ラブニェールギターリサイタル
- 3月9日 角圭司（ゲスト尾尻雅弘）ギターリサイタル
- 3月23日 クエンカ兄弟ギター&ピアノ・デュオ・コンサート
- 4月13日 莊村清志ギターリサイタル
- 4月27日 烏力亜娜 古箏の調べ

〒315-0124 石岡市柴間 431-35 ギター文化館
0299 - 46 - 2457 FAX 0299 - 46 - 2628

深つぼ

伊東弓子

又願天災地變橫難殃死諸戰災
戰死病歿諸精靈等超生淨土三界
万靈有緣乃至法界平等利益

西風に吹かれながら湖を眺めていた時、自然にこの読経の一節を声に出していた。

ここは土地の人が「深つぼ」と呼んで、恐れられてきたところです。絶対的と思われていた分厚いコンクリートの堤防が沈みだし、補修工事をしたばかりだという。

今でこそ平穏に見える湖も、自然とここに住む人間との戦いの歴史であった。信じられないだろうが、昔は湖岸が高波に襲われ、田畑、家などが飲み込まれ流されたのだった。

読経を声に出していると、ここが海であった頃の猛々しい姿、湖岸に人が住み始め何とか自然を支配してやろうとチツポケな知恵と人力で右往左往している姿、そして現代文明の力で擦り伏せてやるとばかりにブルドーザーとコンクリートで固めている現代の姿が頭を巡ってきた。

コンクリートが自然に勝ったと思っていたら、沈みだして補修工事が行われたのであるが、おそらく自然はそれをあざ笑うように、次の補修工事をさせるに違いない。人の行為が何となく哀れに思えてしまった。

感傷的な気分、風に吹かれ読経を口にしていたら、深つぼと呼ばれるになった話が思い出された。

今ではもうその話しを知る人も少なくなってしまう。地名の由来なんか、と思われるかも知れませんが、由来の中には現代人にとつても忘れてはならない暮らしの標のようなものがあるとと思われるものが多いといえます。この話しが現代の暮らしの道標になるかどうかは別にして、ここに紹介してみたいと思います。

「私は無実です。話を聞いてほしい！」

そう叫ぶ男の声が全く耳に届かぬ様子に唐丸籠を担いだ村人の列は進んでいった。籠に乗せられているのは若い坊さんでした。

その坊さんの寺は下玉里村にあつたのか、上玉里村にあつたのかは私も知りません。しかし、その唐丸籠は河の方に運ばれていったのでした。坊さんが必死に訴える声に、村人達は目をそらし、口も閉ざしていたそうです。

「みなさん、分かっているでしょう。どなたか一言いって下さい！」

何度坊さんが訴えても、村人はただ影から手を合わせて籠を見送ったといひます。

唐丸籠の運ばれたこの道は、上玉里の寺から館跡そばの稻荷堂の方へ行く道で、この付近の畑は、作物が良く採れ、林も浜も豊かで普段はかなり往來の多い所だったそうですが、その時は人の姿は見えなかつたといひます。

「往生際が悪いかもしれないが、死ぬことは怖くはない。罪を着せられたままで死ぬのは悔しい！」

しかし、籠を担ぐ村人も、影に見送る村人も

無言のままだったといひます。おそらく籠の肩に食い込む重さは実際の何倍にも感じられたことと思ひます。

そして、坊さんは最後にこう言つたそうです。「この怨み、必ずこの地に残していく。城内にはやがて人は住めなくなるだろう。人絶えて部落も無くなるだろう！」

その声は天に響き、雲を動かしたとも言われています。

唐丸籠は城の内を過ぎ、坂を下って行き、やがて波打ち際に着くと、坊さんは籠から出され、簀巻きにされると河に投げられたのでした。

すると湖の水は突然に高波をあげ、河に投げ入れられた坊さんを一のみに飲み込み、湖底に吸い込んで行つたといひます。

黒雲が湧き、風が強く吹き荒れ、籠かきの村人達は吹き飛ばされるようにして逃げ去つたといひます。

高台にいた村人達も余りの恐ろしさに身を竦めながら、物凄い水音と共に、山のような高波が一瞬の如くに坊さんを抱きかかえ渦巻いて引いて行く様を見ていたといひます。そこには、大きな水穴が深く深く出来ていたように見えたといひます。

それから河は何日も荒れ、不漁が続いたり、事故が起こつたりしたそうです。また低温が続く畑の物、林の物も不作となり、部落は一変していったそうです。病が流行り、人々には今までの助け合つて気が持たなくなつたり、いがみ合ひばかりが続く、人は絶え、家は朽ちていったと言

います。

坊さんが簀巻きにされて投げ入れられた所は、坊さんの恨みを貯え深い穴が出来「深つば」とその後呼ばれるようになったということです。

今、この河は魚も貝も棲まなくなり、外国の魚が大きな顔をして泳いでいます。水も溜まっているだけで、流れはありません。

畑の方には柿や野菜が実り、コスモスも時が来る風に揺れています。林は荒れてゴミ捨て場となりかけています。

この四、五年の間に、家が三丁四軒建ちました。昔の話を知るよしもないでしょう。

私たちは、その地にどんなことがあったのか、どんな人が暮らしていたのかなどの過去のこと、目を向けることは殆どありません。畑や田が姿を消して、コンクリートの建物や道路が出来ていく中で、過去のことなど知る必要も無いほど、忙しい日々を過ごしています。

此処で行き倒れた人がいた。殺された人がいた。戦で亡くなった人がいた。恨みを残して逝った者がいた。など等、思うことも必要も無いでしょう。

風に吹かれながらも一度読経を口にしてみる。

又願天災地変横難殃死諸戦災

戦死病歿諸精霊等超生浄土三界

万霊有縁乃至法界平等利益

虫も動物達も生命絶えて土に同化するように入も土に還ると思えば、人の世の実相がどうあ

れ、気にすることは無いのかも知れません。でも私は、人間を特別視するつもりはありませんが、人には心があるのだから、と考えてしまいます。そして、心があるのだから、過去に生きた者や土地への思いを馳せてやりたいと考えます。

現実の生活を刹那な喰い潰しにしてはならない
と思えます。
明日はいい日にしたいね。
大きな赤い陽が、周囲をそれぞれの色に美しく染め上げて沈んでいきました。

ギター文化館発 「常世の国の恋物語百」 第6回公演

なるたき

小林幸枝主演朗読舞劇・鳴滝にて...

野口喜広オカリナ・コンサート・風の声

= 2月17日(日曜日)午後1時半開場 午後2時開演 =
(入場料: 前売券2500円 当日券3000円)

前売チケットは、ギター文化館、ことば座事務局にて取り扱っております。

第一部 朗読舞劇「鳴滝にて・・・」

「私が神から与えられた天職はあなたを愛することです」
鳴滝を見上げて浮かんだ言葉が「天職」であった。その天職の言葉に、小林幸枝の舞をイメージしたとき「私の天職はあなたを愛することです」の恋物語が生まれた。兼平ちえこの常世の国の五百相を背景に、野口喜広の土笛(オカリナ)の風によって、あなたを愛するという天職を舞う。

第二部 野口喜広オカリナ・コンサート

常世の国の風に吹かれて、霞ヶ浦を見下ろす高台の雑木林に移り住んできた土の風奏者、野口喜広が、自作「棚田の春」他、大地の声をウッド・ホールに聞かせます。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5-1-35
0299 24 2063
fax0299 23 0150

馬滝

小林幸枝

一月某日。ことば座二月公演の「鳴滝にて」の演技イメージ創りのために、鳴滝を見に出かけてきました。

鳴滝にはもう何度も来ていますが、来るたびに舞いの表現が変化してくるのが不思議というか面白い。これは、私の鳴滝をみるときの心の様子が違うからなのでしょうが、自然の風景というのは、人の心に如何に呼応して優しく受け入れてくれるからなのでしょうと思います。

鳴滝の丁度裏側辺りに、馬滝という滝があります。鳴滝を見ながら、自然の力を考えていたら、どうしても馬滝を見たくなってしまう。

名前が違つように滝の顔も、私に語りかけてくれる風も違つだろつと思つてしまつたら、どうしても直ぐに行つてみたいと思つてしまつたのでした。

稽古の前に出かけてきたので、同行して下さいている近藤さんに、馬滝に寄つて見たいけれど良いかと伺つと、構わないと仰られたので、早速稽古前の道草となりました。

馬滝に着いて、滝を見上げたとき、何と優しい滝かなと思ひました。滝の入口に案内板があり、それを見たら、馬滝は「幻滝」とも呼ばれているとありました。私が優しい滝と思つてしまつたのは「幻」と呼ばれる別名にもあつたのでしよう。

馬滝は、鳴滝のように急な岩肌を一気に流れ落ちる滝ではなく、段々になつて山の上に伸び

ている滝でした。滝を挟んだ木々も、太い古木ではなく、雑木林のような感じで下を落葉に包まれてありました。

私は、美しい滝だと思つてしまいました。そして、何処までも続くに見える段々の滝の先端に行つて見たいと思ひました。

滝に沿つて、獣道のような道が登つていきます。私は、獣道に引つ張られるように登つてしまいました。段々の滝は、登つても登つても、上に繋がつていきます。

上ばかり気にして登つていたのでしたが、途中で近藤さんのいたことに気付き、振り返つたら、思わず「わーッ、美しい！」と叫んでしまいました。もしかしたらこの馬滝は、見上げる滝ではなく、見下ろす滝なんだと思つてしまいました。

近藤さんの姿が見えなく、あれッ？と思ひ目を凝らすと、私の思つているよりもつと下の水の落ち込みのところをこちらを見上げていました。

近藤さんを確認したので、私はもつと上に登つていきました。どこまで登つても滝は続いています。もしかしたらこの滝は天にまで届いているのかなと思ひました。

真冬で足下が悪いので、一気に登ることはできません。何度も下を振り返ると、そのたびに美しさが増してくるようでした。私はまた「わーッ、美しい！」と叫んでしまいました。本当に振り返る度に別世界を見せてくれる滝でした。まだまだ続く滝を見上げながら、このままド

ンドン登つていったら、もしかしたら天に届き、そこに天女が舞っているかもしれないと思つてしまいました。そして、幻滝と呼ばれるのは、こつことなかなかと、思つたのでした。

もつと上に、と思ひましたが、道はドンドン険しくなつていて、今日は無理だなと諦めることにしました。下を見たら、はるか下のほうで近藤さんが滝の水を飲んでるのが見えました。この馬滝の山は、鬱蒼とした常緑樹の山ではありません。雑木林が険しく登つている山です。春になつて、緑葉が薄く色を塗り始めたら、本当に美しく幻想的な風景を見せてくれるに違ひありません。

春になつたら、確り山登りの支度をして、この滝の始まりのところまで登つてみようと思ひます。そして、きつといるに違ひない天女と一緒に、春の舞を舞おうと思つていきます。

節分が過ぎると、春がドンドン近づいてきます。春になつたらきつと来るからね、と馬滝に約束して獣道に戻つてきました。獣道を降りながら、この古里は、本当に常世の国なんだと改めて思ひなおすことが出来ました。

馬滝

近藤治平

小林さんの原稿を読んで、同じタイトルで、同じ場所を語つてみるのも良いだろうと、敢えて同じタイトルにしてみました。

そう、一月某日、小林さんと鳴滝に出かけた

のであった。確かな舞いのイメージをつくり上げるためには何度みても見過ぎということはない。実際、出かけてくる度に滝の与えてくれる印象は変化し、風景も自然の生き物だと納得させてくれる。

馬滝のことは、鳴滝をモチーフに朗読舞本を書こうと決め、鳴滝に来る度に小林さんから聞かされていた。しかし、正直な所、小林さんから言われても自分から行ってみようと思うことはなかった。鳴滝の本を書くことで頭が一杯になつていたこともあったのだが、鳴滝の本が書き終わったら、次は霞ヶ浦をモチーフに恋物語を考えようと心積もりしていたからであった。

今から馬滝へ寄つてもいいですか、と言われ何気なく行こうと返事をしたのだが、余り期待する気持ちはなかった。しかし、行ってみてすっかり心変わりをさせられた。馬滝をモチーフに朗読舞本を書いてから、物語の題材を霞ヶ浦に移そうと。

鳴滝は恋瀬川の源流の一つで、馬滝は園部川の源流の一つにある。これまで、恋瀬川の物語はいくつか書いてきたが、園部川はまだ一作しか書いていない。もう一作ぐらいは書いておこうという気持ちにさせられたのである。

一つの風景を見て、人はそれぞれ異なつた心象を抱くものであるが、小林さんの文を読んで、これ程心象が違うものかと、新たな驚きを知ることが出来た。

小林さんは、馬滝を美しく幻想的な滝だという。小さな落差が階段状に遙か山の上に続く滝

であるが、小林さんはそこに幻想を感じ、ドンドン上つて行つたら、その先に天女の舞う国があるかも、と心象したという。

ところが私はというと、何と「のつぱらぼうな」と感じてしまったのである。遙かてっぺんに連なる段々の滝がのつぱらぼうというのも妙であるが、実際そう感じてしまったのである。そして、こののつぱらぼうは物語になると直感させてくれたのであった。

如何に変化に富んだ風景であっても、何も感じさせない風景がある。しかし、山の急斜面に谷を作り、段々に連なる滝がのつぱらぼうに感じられるなんてことは滅多にあるものではないのつぱらぼうと心象した時には、すでに次の物語のモチーフは馬滝にする、と即断できたのであった。しかし、「のつぱらぼう」と心象出来たのは実に愉快なことである。

その晩、早速、小林さんに舞わせてみたいと思つた内容の恋歌(詩)の教編を書き上げた。その中から小林さんに舞つてみたいと感じる詩を選んでもらい、それから「のつぱらぼう」の物語りを創つてみようというのである。

翌日、小林さんに詩を渡し、好きなものを選ぶように話した。そして、のつぱらぼうのことも彼女は非常に面喰らつた顔をして、何故のつぱらぼうなのかを知りたがつたが、私にもまだ理由が定かではない。のつぱらぼうの必然性も無いのだ。それを考えるのは、小林さんが、書いた詩を選定した後のことである。

さて、今日は私に少し紙面をいただけそうな

ので、普段話すことのない私の創作について少し書いてみたいと思う。

私の物語の創作は、実体験に基づいたドキュメンタリーであるという、??? と首をかしげる人も居られるだろう。しかし、私の創作物語は、私自身の実体験ドラマなのである。

実体験、即ち現実に体験した事実である。

昨年、ことば座の公演のために書いた恋物語は十一作であるが、これらも全て私自身の実体験の物語である。千年以上の時代を書いた物語も、私の実体験の話である。

そんな馬鹿な、といわれるだろうが、そうなのである。

何となく思いついた発想が、ある日突然に明確なイメージとなつて現れてくることがある。この明確なイメージが、私の現実体験なのである。

例えば、桃浦の湖岸に天女が舞い降りてきて、私に恋をする。そんな愚にもつかないことを想っている、ある日突然に明確なイメージとなつて、私の前に天女が舞い降りてきて、私に恋を告げ、そして恋の舞を舞うのである。

何だイメージの中のことか、と思われるでしょうが、イメージというのは空想ということではなく、現実体験を意味するものなのです。

イメージの実際の内容・意味を、心理学では類知覚体験と説明されています。類とは同じという意味ですから、明確なイメージとして現れたものは、現実体験と同じ意味を肉体に与える

ということですが。

フィクションであっても、リアリティーのある物語を書くというのは、明確なイメージを持ってそれを現実体験できたからといえます。

天女が私の前に降りてきて、恋を告げ、舞を舞うという明確なイメージとなって現れれば、私は天女と恋を語り合うという現実体験をしたということなのです。この類知覚体験という現実体験がないと、リアリティーの無い、心の無い物語になってしまいます。

私が、天女と恋をするという明確なイメージとなつて現実体験がなされれば、私はその体験を詳細に記録することで真実としての物語が完成するのである。だから、私の書いた物語は、実際に私に起こった事実の記録なのです。

これは、テーマを与えられた請負仕事の場合も同じである。明確なイメージのないまま、それこそアマチュアの人たちが知りたがる技術というもので、手なりに書いて出すと、ドラマのプロデューサーや編集者の人に使い物にならないと突き返されてしまうのである。

それは、明確なイメージとなつて現実体験した私が存在しない話を書いたからで、奇抜なら、目新しければといった姑息な小手先の私の心にクレームが来るのである。だから、私は現実体験のない私を書くことはしないのである。これが私の語れる唯一の文作法といえる。

ついでだから、イメージについて少し触れておきましょう。イメージとは、先に書いたように、心理学ではその意味について、類知覚体験

と定義しています。心理学におけるイメージの研究が進んだのは、現代演劇の祖といわれているスタニスラスキーの俳優術からであった。役作りの上で不可欠なことはイメージを作ることであると述べられた事から、研究が始まったのでした。

人間の行動学では、DNAとして組み込まれたこと以外の動作行動は、知覚体験がないとできないといわれているが、現実には実際の知覚体験がなくても行なえる例が日常しばしば起こります。これは何らかの作用によって、知覚体験と同等の何かがあるに違いないと思われてきたのですが、その何か、イメージというものであったのです。

今では、イメージが類知覚体験であるということが解り、人間のあらゆる行動の分野に、イメージングを取り入れられており、スポーツの世界では既にそれを実行しない人はいない。

元々、芸術表現をする人達は、この学問的解明がなされる以前から、イメージという呼び方はしなかつたが、類知覚体験の内容は経験的に行なわれていた。キャンバスがこういふ絵を描いてくれと訴えかけてくる、楽器がこのように弾けと訴えかけてくる、など等はまさにイメージングの世界なのです。

しかし、類知覚体験としてのイメージは、スポーツや芸術の分野だけではない。経営者や政治家達にとつても不可欠のものです。経営も政治も理詰めで行うのかといえ、そうではない。将来のビジョンとしてのイメージが確りと描け

なければ会社も国も県も市も経営は出来ません。その考えにたし足元の石岡を考えた時、芸術やスポーツ、医学の分野以外にイメージということの実態を学び実践できている、指導的と称する人達のはたして何人いるのかと、大いに疑問が湧いてくる。ちよつと物語の創作とは離れてしまったが、矢張り気になることではある。

「ふるさと風の会」会員募集中!!

ふるさと風の会では、ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える仲間を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化を真面目に表現し、ふるさと自慢をしたいと考える方々の、入会をお待ちしております。会の集まりは、月初に会報作りを兼ねた懇親会と月一回の勉強会。入会に関するお問い合わせは、下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400
兼平 ちえこ 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

夜明けの碑 いしづか

打田昇三

何年前になるか、NHKの大河ドラマで「新撰組」が評判だったが、その頃に、私は両親などの墓参に行ってお盆でもお彼岸でもないから誰も居ないと思つた墓地で古そうな墓所を掃除している年配の婦人を見掛けた。「煎り豆地蔵」伝説のある曹洞宗雲集寺（かすみがうら市中志筑）である。顔を合わせて挨拶を交わした後、問わず語りに婦人が新撰組のことを言い出した。高齢の女性が全般的な歴史の話題を口にするなど稀なので興味を持って拝聴した。その墓所は新撰組幹部だった伊東甲子太郎（いとうかしたろう）・鈴木三樹三郎（すずきみきさぶろう）兄弟の両親が出た家のものだという。伊東甲子太郎は新撰組のメンバーで唯一人靖国神社に祀られている人物である。

新撰組は映画などでも知られているからドラマ化もうなずけるが、水戸黄門以来、勤皇思想の元祖と目されていた茨城県民にしてみれば、志士たちを捕殺し、仲間の粛清に明け暮れた集団の物語よりも、「尊皇攘夷」の名のもとに結集しながら賊徒として追討されて冷酷な扱いを受けた末に越前敦賀海岸で三百五十二人（一説では三百五十三人）斬首、百数十名の島流し、百八十人の追放という前例の無い残酷な処分を受けた「天狗党」こと水戸藩尊皇攘夷派志士たちの苦難の物語をドラマにして貰いたい思いがあるかも知れない。「主人の曾祖父に当られる方

が三百五十二人の中に入っているそうで、兼平智恵子さんが「ふるさと“風”」の第4号に「御霊送り」と題して天狗党の一員として殉難された祖先のことを書かれている。伊東甲子太郎と鈴木三樹三郎も江戸へ行っていないければ先ず間違いなく天狗党の一員になっている筈だった。

今から凡そ百四、五十年前の明治維新で国家の姿が大きく変革する時代に身を投じた人たちは時流に乗って或いは高位高官となった者も居れば、縦横の活躍をしながらも埋もれていった、いわゆる草莽（そうもう）の土も多い。勿論、現代でもその社会構造は変わっていない気がする。とかく歴史というのは成功した一部の人物の伝記に止まってしまうが、それで良いのであるうか？そういう個人的な疑問から、不運・不遇を越えて悲惨な結末に終った「天狗党事件」がドラマで多くの人々に知られればと思つたりもしたのだが…。

天狗党は元治元年（1864）春に藤田小四郎の呼びかけで石岡の旧・金丸町にある鈴之宮稲荷神社に結集してから筑波山拳兵に至る間に幕府側の弾圧方針が固まり各地での交戦を余儀なくされて、本来は自分たちが意図していた憂国の真情が水戸藩にも幕府にも朝廷にも届かず、単なる過激派暴徒として鎮圧されてしまう。その原因には当時、各地に溢れていた無頼の徒が天狗党の名を騙って金品強奪などの乱暴狼藉を繰り返していたことなどもあるが、最大の原因は「尊皇攘夷」を言い出した水戸藩が藩主の交

代（斉昭から十三歳の慶篤へ）、藩政の封建化、尊皇攘夷派から保守派へ権力基盤の移動）などで、幕府の言いなりに藩政が変わってしまったことであろう。

西暦のちよつど1800年、水戸黄門が没してからも百年目に当る寛政十二年に江戸・小石川の藩邸で生まれた徳川斉昭は、学者で下級武士の藤田東湖らに擁立された形で三十歳にして第九代藩主となった。以来、水戸藩は水戸黄門が始めた「大日本史の編纂」と相俟つて、弘道館建設に象徴される「水戸学」を通じた「文武の振興、藩政改革」が行われ、やがて「尊皇攘夷運動」の源流として諸藩の先進的思想を持つ人物に影響を与える。水戸学の中心にいて「尊皇攘夷のカリスマ」だったのが藤田東湖なのである。東湖は、安政の大地震で一旦は逃れながら火鉢の火を心配して家の中へ戻った母親の上に鴨居が落ちそうになったのを支え、母親を外へ放り出した直後の揺れで倒れた家屋の下敷きになり死んだことは知られている。この地震では江戸だけで二十数箇所から火が出て死者は六千六百人も及んだそうで、母親の行動は間違っていないかったのだが、息子の死は日本の歴史を大きく変えてしまった。

水戸に生まれた東湖は長じて剣術を得意とし、学問は不得手だったと言われるが父親は儒者だから跡取り息子が単なる剣の達人では困る。「文武両道」を訓戒して江戸に連れて行き、何人かの先生に武術と学問とを習わせたが、その一人に「太田錦城（おおたきんじょう）」という

儒学者がいた。加賀大聖寺の生まれで幼時から神童の名が高く、独学で「折衷学派（せちゅうがくは）」と呼ばれる儒学の大家となり仏道の家臣として加賀百万石の藩主から招かれた程の人物である。この人は、忠臣蔵の大石内蔵助らの切腹を幕府に進言した荻生徂徠（おぎゅうそらい）のことを「浅薄疎謬（せんぱくそびゆう）はかで誤り（は論ずるに足らず）」として嫌い、戦国時代の風習を非難し、天下の平和を実現した徳川家康の功績を「神恩」として強調した。「平和のため、女房・鉄砲・仏法の三宝（三つの「ほう」）が必要」という珍説？ が持論だったらしい。

水戸藩上屋敷があつた小石川辺りから浅草方面に抜ける「言問（こととい）通り」に面して丁度、上野公園の北部一帯に谷中墓地が広がっているが、その一角で動物園や上野高校の北側に当る場所に「一乗寺」という日蓮宗の寺があり玄関前に塔のような形で太田錦城の墓（東京都指定史跡）が建てられている。一乗寺は私の祖父以前の先祖の墓がある寺のだが、末子だった父は母方の縁で冒頭に述べた雲集寺に葬つて貰つた。罰当りかも知れないが父親が早く死んで先祖の墓のことを「上野」としか聞いていなかった私は、近年に一乗寺を探し出し、そこで太田錦城先生の墓も見つけたのである。雲集寺も一乗寺も勤皇の志士に縁が有つたのは不思議なことだと、この原稿を書くことにした。

横道に逸れたが話を天狗党に戻すと、石岡から筑波山、日光、鹿沼、太平山、そして再び筑

波山へ戻り、水戸城を支配して居る保守派を討つ計画を立てた。これに対して水戸藩出身者以外の同士が趣旨に反するとして脱退する騒動があり、主力は石岡へ戻つて水戸領の小川（小美玉市）から水戸を目指したが途中には水戸城から繰り出した軍勢が待ち構えていた。悪いことには太平山に立て籠もつたときに本隊と分かれた田中愿蔵（たなかげんぞう）の隊が水戸近辺に來た。田中愿蔵は水戸藩の医者で次男で藩士の家の養子になつた武士だという。

天狗党田中隊は、現在の栃木市で軍資金調達に協力しなかつた商人たちを惨殺して町を焼き払うなど残虐行為を繰り返してきた。そのため水戸近辺の住民までが抵抗組織をつくり田中隊以外の天狗党を討つ態勢を整えていた。待ち構える軍勢と激戦を交えながら水戸に近寄れない主力本隊は那珂湊へ抜け、そこでも討伐軍と激戦を交えた。一応の勝利は見たが、幕府が諸藩に追討を命じたために、これを避けて八溝山麓を大田原、鹿沼、太田（群馬県）、倉賀野から中仙道に入つた。禁裏守衛・將軍後見職として京都に居た一橋慶喜に決起の真意を訴えようとしたのである。しかし頼つた相手は既に天狗党を見捨て、幕府軍以外に自分の直属部隊からも討伐軍を繰り出していた。全てを諦めた一行は武田耕雲齋の判断で越前大野まで出陣していた加賀藩の陣に投降し、これを天狗党討伐責任者・田沼意尊（たぬまおきたか 幕府若年寄・駿河相良藩主）が引き取つて越前敦賀に護送し浜辺の練倉に監禁虐待することになる。慶喜は武田

耕雲齋以下を罪人とみなして、その処分を田沼に任せた。

先年、亡くなられた作家の吉村昭さんが「天狗争乱」という作品で事件の経緯を漏らさず書いておられるからドラマ化は可能と思うのだが… 実は、NHKで司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」をドラマにする構想があつて、話が進みかけたときに担当ディレクターが自殺する騒ぎがあつたという。「坂の上の雲」は四国・松山出身の三人（正岡子規、秋山好古、秋山實之）が主人公の物語ではあるが、背景には日露戦争があり多くの戦争犠牲者が出てくる。日本側は海軍が秋山實之（連合艦隊先任参謀）の立てた作戦で日本海海戦に勝利したけれども、旧式の武器しかなかった陸軍は二〇三高地を始め各地の戦場でロシア軍の火力・兵力に手も足も出さず苦戦を続ける。日本に騎兵を創設した秋山好古が軍上層部へ強引に掛け合つて、秋山騎兵団だけが持つていた機関銃が奉天への進撃で日本陸軍各師団壊滅の危機を度々救つた。戦争犠牲者が多く、現実とはいえ残酷な物語だからドラマなどにするな！」と司馬さんは言い残したそうである。NHKディレクターの自殺原因もそれに関連することらしい。紆余曲折の末にドラマ化は実現するらしいと聞いたが、戦場の場面は多くなることであろう。

そのことを考えると、規模は水戸藩中心になるが武田耕雲齋の妻が夫の首を抱かせられて幼い子を道連れに斬首され、改革派を弾圧して家老に出世した市川三佐衛門は明治維新後に「逆

さ磔(さかさはりつけ)という極刑に処されるなどの残酷な結末、そして藩政の無能力、繰り返された藩士の派閥抗争、血で血を洗う復讐の繰り返しなど、祖先が伏せたいと思う部分を曝け出す結果に成りかねない「天狗党事件」は、幕末の悲しい出来事として映像化などせずに、時代の犠牲となった当事者の冥福を祈ったほうが良いような気もする。

そもそも、徳川御三家の水戸藩が、幕府の存在を否定しかねない尊王攘夷運動の中心になって、水戸藩への密勅降下事件「桜田門外の変井伊大老暗殺」などを惹き起こしたから、諸藩からは激動変革する時代のリーダーとして羨望と驚きの目で見られていた。ところが攘夷運動に関わっていたのは水戸藩の下級武士、神官、領内の郷土、憂国の若者などで、先代藩主・徳川斉昭の遺志を継ぎ、斉昭が登用した藤田東湖の思想に影響を受けた者たちである。肝心の藩重役や上級家臣など譜代の重臣は幕府の顔色を窺うだけで事が起これば弾圧するしか能がない。天狗党総裁に担ぎだされた武田耕雲齋は「大番頭」という重臣だったが、徳川斉昭に抜擢された役職であろう。天狗党発起人のような藤田小四郎は東湖の四男(妾腹)で、父親が死亡したときは十四歳、父親の影響以外に、子供の頃から尊王攘夷派の武士の教えを受けていたようである。

一橋慶喜などは徳川斉昭の子として周囲から父親の意志を継いでくれる人物として期待されながら、自分が第十五代の将軍になれる可能性

が見えてくると、天狗党の行動をあつさりとする定する立場に鞍替えする。敦賀の惨劇に対し西郷隆盛は「慶喜非情、頼むに足らず」と激怒し、攘夷運動に反対していた或る皇族さえも(幕府の残虐行為は)国家を憂へざるの処置、誠に悪(にく)むべし」と憤激し、薩摩の大久保利通は「この非道の行為は幕府が近く滅亡することを示したものである」と断じたという。将軍となった慶喜は、倒幕運動の足元を見透かすように「大政奉還」の芝居を打った。政権が交代しても自分が新政府に参画できるように画策したのである。しかし明治新政府成立の切っ掛けとなる「小御所会議」では西郷隆盛らの怒りが強行論(幕府討伐論)となつて明治維新というクーデターに発展する。西郷らの睨んだとおり鳥羽伏見の戦争で幕府軍が負けると、將軍の慶喜は部下を放置して江戸へ逃げ帰った。将棋で王様だけをとれば勝つように戦争でも総大将の首を取れば勝利である。慶喜はそれを恐れ、普段は無視していた勝海舟を通じて西郷に命乞いを頼んで貰って水戸で謹慎したが評判は良くない。もし慶喜が斉昭の子でなければ殺されたであろう」と言われたそうで、天狗党殉難諸士の怨念が官軍の強引な武力東征という形で幕府を潰すことになったと私は勝手に思い込んでいる。

武田耕雲齋の一族で一人だけ生き残ったのは孫の金次郎である。始めは死刑を言い渡されたのだが少年ということで五島列島へ島流しに減刑された。輸送する船を出すように命じられた薩摩藩は拒否して、西郷隆盛が幕府へ断りを申

し入れたという。そのため百数十人は敦賀の鯨蔵がそのまま流刑地になった。慶応二年(1866)五月に流罪から小浜藩の預かりになると小浜藩(譜代大名・酒井氏・十萬石)では浴室やトイレを設置したり布団を与えてくれるなど人道的に扱ってくれたらしい。この先代藩主は安政の大獄を起こした井伊大老の腹心だったが、藩からは大獄逮捕者第一号の梅田雲浜を出すという不思議な藩である。天狗党の係の役人が隠れ攘夷派だったのかも知れない。翌年の五月には朝廷の命令で一同が釈放される。

打田昇三歴史エッセイ

ふるさと「風にたずねて」()

小紙に毎月連載されている打田昇三氏の「ふるさと歴史探訪」が二冊の小冊子にまとめられて、ふるさと風の文庫として発売することになりました。(二冊組：1000円)
小さな手作りの文庫本ですが、風の会のふるさとを思う心が一杯の本です。
冊子は、ギター文化館、中町商店街力フェ・キーボーにて販売しています。

武田金次郎以下百数十人は水戸へ帰らず京都へ向かった。西本願寺の北隣に在った日蓮宗の四大本山と言われる本圀寺(ほんくくじ)は、水戸黄門が名前の一字を貰って「光圀」から「光園」に変えたと言われるほど水戸家と繋がり深い寺で、文久三年(天狗党拳兵の前年)から京都御所警衛のために水戸藩士が詰めていて「本圀寺組」と呼ばれている。翌年の正月には將軍の家茂が上洛したので勢力補強のため水戸領内の神職・郷土・農民の志願者から選ばれた者が加わった。さらに天狗党が北陸路を辿る前に主戦論を唱えて本隊から分かれ本圀寺へ行った者もいる。御所の護りが仕事だから思想的には天狗党と同じである。慶喜の弟で後に水戸藩主となる徳川昭武の指揮下にあつた。

武田金次郎以下が京都へ着いたとき、時代はすでに徳川幕府から離れていた。新たに権力の座についた新政府は金次郎に「政府への出仕」を命じた。天狗党の犠牲に対する償いの意味もあつたかと思う。これが実現していれば明治の顯官に水戸人・武田金次郎の名が刻まれた筈である。しかし金次郎は「父祖の仇が討ちたい」と水戸へ帰ることを強く希望した。明治維新の黒幕・岩倉具視(いわくらともみ)が許可したとされるが、天狗党事件に憤激していた西郷隆盛の意向があつたかも知れない。政府は「混乱する水戸藩を鎮撫せよ」という命令を与え、武田金次郎は天狗党の生き残り本圀寺組とを率いて水戸城に入った。今や官軍となつた新天狗党は復讐のために佐幕派の掃討を開始した。主

だつた武士だけでも三十名以上が惨殺され、戦鬪が続いて水戸は恐怖の巷と化した。水戸に謹慎していた前將軍の徳川慶喜が調停に乗り出したが既に人望を失つていたので失敗に終り慶喜は勝海舟らの斡旋で静岡に隠棲した。

武田金次郎は水戸藩の重役に就任し明治四年の廢藩置県を迎える。混乱は終るかに見えたが血で血を洗う水戸藩内抗争の怨念は深く、対立が一般庶民にまで及びに至り新政府は治安維持の実績がある大蔵官僚を県知事に据えた。この人事は水戸人のプライドを傷つけ、水戸城が何者かに放火された。逮捕された者は旧・水戸藩士など四十余人、金次郎も嫌疑を受けて辞職し何処かへ去つた。

遡つて元治元年初夏、日光などを回つた藤田小四郎らが筑波山に戻つてきた頃には江戸でも天狗党の噂で持ちきりになつていた。天狗党に加わりたいと思つていた伊東甲子太郎は江戸に居た浪士たちと取り敢えず「天狗党を応援する会」を結成していた。或る日、上野で開いた会合には六十名ほどが参加したが、その中に筑波山麓の戦場から離脱し追討を逃れていたという者がいて、密かに甲子太郎に告げた。「筑波山の拳兵も時期を失している。今回は敗れると思うので、貴方には江戸に残つて(天狗党の行動に加わらず)後の有志のことを宜しくお願いしたい」その様子が心から頼んでいるようだったので伊東は筑波行きを止め、尊王攘夷運動を実現する機会を待つていた。そのような時に新撰組からの誘いが来たので京都で活躍できると入隊

したという。もし天狗党に加わつていれば伊東甲子太郎の命は二年早く無くなつていたことになる。

伊東甲子太郎は最初に述べた雲集寺に墓所のある家の先祖であるが、父親の志筑藩御目付・鈴木三四郎忠明が天保の大飢饉の際に領民救済と藩の改革のことで重役に睨まれ無実の罪で閉門蟄居、家名断絶とされたため脱藩して汚名を晴らしたとされる。藩に愛想を尽かした鈴木忠明は石岡市の東大橋で私塾を開いていたといふから墓所は別にあることになる。忠明の長男・大蔵は、水戸藩主となつた徳川斉昭が講道館の師範として召抱えた神道無念流の達人・金子健四郎の道場に入門していたが、師が江戸勤務となつたので同行して志筑藩邸に居候しつゝ麹町の道場に通つた。志筑藩は明治維新で一万百十石の大名にして貰つたが、禄高八千五百石の交代寄合(参勤交代をする旗本で格式は五万石相当)である。旗本とは禄高二百石以上、一万石未満の幕臣を言い実数五千二百人ぐらいといわれる。志筑藩の本堂氏は五百石を一族に分地して藩の禄は八千石であるが常に旗本でも五番以内の大名だつた。しかし大名並みの格式を維持するのに四苦八苦していたから、脱藩者の息子を居候させる余裕は無いのだが水戸藩劍術指南の弟子とあつては文句も言えなかつたのであつた。

麹町の道場で北辰一刀流の伊東道場を知り入門、やがて道場主・伊東精一の婿となつて鈴木大蔵改め伊東甲子太郎を名乗つた。劍の腕も

立ち弁舌爽やかで魅力ある人物だったらしく江戸の道場でも知られるようになる。近藤勇らが池田屋襲撃事件後の新撰組を増強するために江戸へ戻ってきた時に、北辰一刀流の千葉周作門人と称していた藤堂平助を介して近藤に勧誘され、幹部要員として新撰組に入ったのだが、伊東の本心は「尊王」にあり、「幕府一筋」で武士に憧れる近藤や土方らとは「攘夷」で一致しても最初から相容れない。ただ新撰組は京都守護職の会津藩主の配下に置かれていたから、天皇を護る任務もあり勤皇思想も必要ではあった。入隊して直ぐ、伊東は新撰組参謀に推された。

一年後、將軍・家茂が長州征伐の目的で上洛した。その途中で反対運動を起こす計画があったのだが、これを新撰組が察知して出動し関係者が捕縛された。その中に水戸藩関係者らしい井上健三郎という者がいた。逃げた犯人の水戸浪士・鯉沼伊織を匿った罪だったが、先ず命は無いものと思わねばならなかった。伊東は勤皇の立場からか水戸藩への恩義からか井上の助命を近藤に嘆願した。このことは新撰組における伊東の立場を悪くし、自分の意思を実現できないことを感じさせた。入隊から一年ほど過ぎた頃から伊東は土佐の坂本竜馬・中岡慎太郎と知り合い、近藤との談判で新撰組から脱退して高台寺党（孝明天皇御陵衛士）を組織し、近藤らに暗殺されたことはドラマなどで知られる。享年三十三歳、京都東山に眠る。大志を持ちながら活躍したのは三年に満たない。

井上健三郎が匿った鯉沼伊織とは水戸藩士で

藤田東湖の子飼いの弟子だった小林彦次郎である。新撰組が江戸に戻って甲陽鎮撫隊として再編成し、各地で官軍と戦ったが利有らず、流山で土方歳三らと別れた近藤勇は一人で官軍に投降したのだが、その官軍の副隊長格が小林だった。隊長は西郷隆盛に心酔している薩摩藩士・有馬藤太で、近藤を身分相応に遇し公平に裁こうとした。小林は有馬の留守中に近藤勇を斬首してしまったので尊王攘夷派の中でも評判が良くない。それでも岩倉具視に坂本竜馬・中岡慎太郎らを紹介し、自分は岩倉の子分になった功績で明治政府の皇后宮大夫、枢密顧問官・子爵に出世した。

近藤勇が官軍に出頭する数ヶ月前に、早くから官軍側に居ながら「偽官軍」として逮捕投獄されたのが鈴木三樹三郎である。二十日足らずで西郷隆盛の命令で出獄を許され薩摩藩の預かりとなった。伊東甲子太郎とは二つ違いの弟で、石岡市史・列伝にも紹介されているように晩年を石岡で過ごし東耀寺に眠る。文字通り波乱万丈の生涯で明治政府に出仕したが地方官で終わった。明治維新を裏で画策した岩倉具視にくっ付いていただけで高官になつた小林彦次郎に比べると「不遇」が感じられてならない。この人が残した「偶感」と題する所懐「無官無禄一身安 唯有枕頭一瓶酒」が諦めの境地に達しているようには思っが…。

三樹三郎は鈴木多門と言い父親の死後に塾を継いで漢学を教えていた。兄と同様に尊王攘夷思想があるから「楠木正成」になぞらえて「楠

木多門丸」という旗を立て、戦争のシュミレーションを塾の教科に取り入れた。個人で陸軍幼年学校を開いたようなもので塾生の親が驚き生徒が減ってしまった。その頃に志筑藩の中小姓（ちゅうごしょう 主君の警護などが任務）を勤める家から養子の話が来た。その屋敷は脱藩するまで父親の住んでいた場所であり願っても無い話ですぐにまとまった。当主（養父）は未だ現役だから、多門には山林取締兼御朱印番という役目が与えられた。基本的に財政が苦しい志筑藩では当主以外の者が楽なポストを得られる筈が無く、また尊王攘夷思想に被れた若者に山林の見回りなど地味な仕事が合うわけが無い。

酒で憂さを晴らして謹厳実直な養父とも合わず自分で勝手に離縁してしまった。母親が怒って鈴木姓に戻させないので三木荒次郎と名乗り、兄・伊東甲子太郎を頼って江戸に行き三木三郎になった。兄に従って新撰組に入り、九番隊の隊長になつたが兄と違って剣術は不得手だったと言われる。兄や藤堂平助らと共に新撰組を離れて御陵衛士になつた際に鈴木三樹三郎と改名した。「日本外史」を著した頼山陽の子で、安政の大獄の発端となつた水戸藩への攘夷勅旨降下事件に関わり刑死した志士の頼三樹三郎にあやかつた改名であろう。兄が暗殺されたときに遺骸の引き取りに行き、新撰組の待ち伏せで藤堂らを失い、薩摩藩に助けられてから西郷隆盛の下で働くようになった。官軍として鳥羽伏見の戦いにも参加している。

西郷隆盛は、勝海舟との会見で江戸の町を戦

火から救ったというので恩情ある人物とされ、上野の森に銅像が建てられているが、密かに逆のこともした。軍人であるから戦術的に荒っぽいことをしている。もちろん、西郷自身が手を下した訳ではなく、西郷に心酔していた子分たちが実行犯である。明治新政府ができる、維新の最高功労者である西郷隆盛は政治の中枢に参画するのだが、明治四年の薩藩置県のと岩倉具視、大久保利通、木戸孝允らは留守を西郷に託して外国の視察に出かけてしまう。西郷は留守を確り護っていたのだが帰国した岩倉らは外国から得てきた知識を政治に反映しようとする。知らない西郷は自然と取り残されたような形になり遂に「征韓論」を反対されて鹿児島に引退してしまう。そのために西郷隆盛に付いていた人物は出世から見放される。

西郷は、天狗党事件で徳川慶喜を心から憎んでいるから何としても官軍と称する薩摩、長州、土佐などの軍勢を率いて幕府討伐の戦争がしたい。ところが將軍・慶喜のほうが芝居上手で、「大政奉還」という予想外の手段で西郷の出鼻をくじいてしまった。武力を行使する口実を失わせただのである。困った西郷は腹心の益満休之助、ますみつきゆづのすけ、伊牟田尚平（いむたしゅうへい）を江戸に行かせた。目的は江戸市中を混乱させて徳川幕府の政治が悪いことを庶民に印象づけることである。その頃、世情騒然とした中で勤皇をかたる浪人などが各地に現れ乱暴を働いていた。港区三田にあったという薩摩藩の江戸屋敷にはそつした無頼の徒が二百人ほど

「ごろごろしていて「御用泥棒」と言われ、江戸の町に出て行つては悪さをしていた。幕府側も治安維持のために出羽庄内藩主（譜代大名）が新徴組（新撰組の前身、近藤勇らと分離して江戸へ戻る）を率いて取り締りに当り、さらに譜代大名や下級旗本（御家人）を投入した。

そつした折に江戸城西の丸で火事騒ぎがあった。西の丸には薩摩藩から嫁いだ天璋院（てんしょういん 皇女・和宮の姑）がいる。失火原因は御殿女中の火の不始末だったが、江戸の人々は「薩摩が天璋院を取り返して江戸城を焼こうとした」として騒ぎたてた。御用泥棒の傍若無人ぶりに手を焼いていた庄内藩の兵は「薩摩の火付け」説をとり、報復処置として薩摩屋敷を焼き討ちにしたのだが、これにより西郷隆盛に官軍出兵の口実を与えてしまい「鳥羽伏見の戦い」が起ころるのである。徳川慶喜の水戸謹慎劇は無駄になってしまった。

益満と伊牟田は六十余名の工作員を連れて薩摩屋敷から逃れ、品川沖に停泊していた薩摩藩の軍艦で西郷の許に帰った。この騒動に関わっていたが表面には出なかつたと思われる人物に下総国（千葉・茨城）の郷士ながら幼くして幕臣に育てられた相良総三（さがらそうぞう）がいる。実家が政治活動に一万両を寄付したと言われるほど裕福で、学業を積み兵学と国学の塾を開いていたこともある。一時は天狗党にも加わっていたが筑波山から離隊して京に上り西郷に接近したようである。官軍が鳥羽伏見の戦いに勝利して江戸へ進撃するのに露払いの役で本

隊に先駆けて民衆に官軍東征のこと（徳川幕府が瓦解したこと）を知らせる任務を与えられ、赤報隊（せきほうたい）を結成した。

鈴木三樹三郎は鳥羽伏見の戦いでは「軍曹」の地位にあつた。現在の兵制で軍曹は中堅下士官であるが、明治維新当時は古代職制を採っていたと思われるから鎮守府の軍団では「將軍、軍監、主神、博士、軍曹」と五つある職階の一つで従八位上、国府役人なら小目代に相当する。どついう経緯か分からないが、相良総三と共に官軍先鋒の任務を与えられた。赤報隊は総指揮官に三人の公家が就き、一番隊長が相良総三で二番隊長に鈴木三樹三郎、近江の水口（みなぐち 二万五千石）藩士・油川鍊三郎が三番隊長に任命された。島崎藤村の名作「夜明け前」にも登場するが、相良総三の一番隊は「租税を半減する」という触れ込みで、官軍に馴染まない街道沿いを迅速に鎮撫していった。

Coffee & Tea Room

《ふらの》

ピザ・パスタ・アレンジ蕎麦・
蕎麦会席料理のお店です

（ギター文化館通り）

看板娘（犬）の「うらら」ちゃんが
皆さんをお迎えいたします。

営業時間 11:30~15:00

16:00~18:00

月・木曜日が定休日です。

（小型犬OKです）

幾ら新政府でも庶民から税金を絞り上げなければ成り立たない。勝手に半減を公約されては困る。「赤報隊が略奪などを行っている」という噂が流れ、慶応四年（明治元年）の一月早々に「赤報隊は偽官軍である」という触れが沿道諸藩に流された。一番隊の隊士は次々と逮捕され相良総三らは、牢にも入れられず取り調べも無く、雨さらしで二昼夜置かれたのち斬首された。このとき二、三番隊は命令で京都に引き返して解散し幹部が投獄された。鈴木三樹三郎は新撰組から抜けた仲間と二月二十日に捕えられ三月七日には釈放されている。身柄は薩摩藩預かりで明治維新を迎えたようだが、赤報隊事件は思いがけない挫折で、官軍の王道を進んでいれば更なる出世も夢ではなかった。

相良総三の死で西郷の闇の部分が消えたことにはなるが「赤報隊弾圧」は岩倉具視の取り巻き連中が画策したらしく、近藤勇を勝手に処刑した人物が想定されてくる。抵抗も受けずに進撃する官軍には、もはや、どこかの国のようないしは不要と判断され切捨てられたのである。罪の口実は幾らでも出来る。

明治維新では最後まで官軍に抵抗しながら、許されて後に新政府の大臣を歴任した榎本武揚（えのもとたけあき）や、新撰組の幹部で剣客として腕を振るい伊東甲子太郎らの行動をスパイとして近藤勇に密告し、会津戦争にまで加わりながら警視庁の警部補になった斎藤一（さいとうはじめ）など勤皇とか佐幕とか立場に関わらない生き方を得た人物も多い。栄達はともかく

苦難の道を行くか天命を保持できるか、その別れる原因を考えると、安政の大獄に始まる水戸藩の苦難は多くの憂国の士を生み、水戸の志士たちは倒幕のために長州藩の志士と、成破の約を結んで破壊を一手に引き受けたという。

ことば座「風の塾」絵と一行文教室

講師：兼平ちえこ・白井啓治

言葉とは、心を口に茂らせること。心とは真実。口とは真実を表現する全ての手段のこと。ふるさと風の風を色に刷いて、暮らしの中の発見を一行の言葉に落とす。一切の形式を忘れ、表現の基本である「自由自在」を大切に考え、筆の遊びを楽しむ教室です。絵の講師、兼平ちえこは、ふるさと風の会会員で、ことば座の舞台装飾を担当しています。絵や文に抱いている固定観念を取り払って、自分を楽しむことに一生懸命の教室には、何時も笑いが絶えません。「老いても青春」を主張し、「常世の国の恋物語百」に挑戦する脚本家：白井啓治の「ちゃんと恋をしてる？」の話の下、箸が転んでも可笑しい青春を絵と言葉の中に再発見し、自分自身を褒め、楽しむ教室です。教室の詳しいお問い合わせは下記連絡先まで。

兼平ちえこ 0299-26-7178 白井啓治 0299-24-2063

あえて苦難の道を選び、何の報われることもない行動に殉じたのはそのためだろうか？悲しいことだが、そこまでしても明治政府は混乱を理由に茨城を三等県に落とした。

編集後記

二月というと節分とバレンタインデーだけかと思っていたら、随分たくさん記念日がある。ちょっと調べてみたら、六日・海苔の日、七日・北方領土の日、八日・テマークの日、九日・服の日、十日・ふとんの日、十四日・チョコレートの日、二十日・アレルギーの日、二十二日・世界友情の日、二十三日・ふるしきの日、二十八日・バスケットの日となっていた。その中で気に入ったのがふるしきの日だ。エコバックが常識的になりつつあるが、ふるしきの多機能な便利さを今一度見直してみるのもいいのではないだろうか。紙の値上がりを嘆く前に、紙袋をふるしきに変えるだけで、相応な紙の節約になると思うが、どうだろうか。

編集事務局

〒315 0001

石岡市石岡13979 2

0299 24 2063

(白井啓治方)